

2023年5月26日

2023年度奨励賞授賞理由

日本教育学会奨励賞委員会

【授賞論文】

白岩伸也「戦死をめぐる記憶と教育の歴史—予科練之碑設立の経緯と背景を中心に—」『教育学研究』第89巻第2号、2022年6月、182-194頁

【授賞理由】

本論文は、1966年に陸上自衛隊武器学校に設置された予科練之碑に注目し、同碑建立の重要な背景をなしていた「軍都」としての想起がいかに軋轢に満ちたものであったのかを論じたうえで、「軍都」のイメージの立ち上がりとともにモニュメントをめぐる議論が始動し、最終的に一つの場所と意匠が選り取られたことを論じている。同碑建立をめぐる政治的葛藤および当初の設計からの変更などが分析され、そのことを通してモニュメントにおける慰霊と顕彰をめぐるウエイトの変化および「青少年の善導」や「精神教育」の意味がそこに付与されていったことが浮き彫りにされている。

著者は具体的なモニュメントおよびそれが置かれた空間に関する多様な史料を読み解きながら、戦死をめぐる過去の記憶の意味づけが集合的アイデンティティに関わる媒体を生み出していく重要な基盤となっていたこと、また次世代の行動や思考の変化を促す作用への期待をも包含していったことの意義を批判的に検討しており、記憶史・表象史研究を本格的に取り入れた教育学研究の一方向性を示している。モニュメントには、ある集団のアイデンティティ形成とかかわる物語（ナラティブ）を物質に刻印することで分有しようとする媒体としての側面がある。その建立には、様々なアクターによる行動や発言の交錯が関わっているが、その経緯は必ずしも明示されているわけではない。著者は、予科練之碑を考察対象として、それぞれの時代状況を背景とした紆余曲折の過程を経て碑文やモニュメントの意匠および設立地が想像の「軍都」とのかかわりにおいて定められていくその舞台裏を可視化し、予科練生の死が「成長の物語」として美化され、教育の名の下に次世代の人びとへ働きかけるメッセージを滲ませていったことを省察している。本論文は、戦後と戦前との接面を照らし出しつつ、その延長線上で現代における想起文化と人間形成との接合に関する重要な示唆を読者に投げかけている。歴史・思想・社会・教育の問題を横断する学術的な知見が示されており、教育学以外との対話が可能な論考として評価された。

審査では次のような指摘もあり、今後のさらなる研究の発展が求められる。本論文における「教育」や「教育化」という言葉は、明らかにこの語が一般的に用いられる際のイメージ（たとえば「学校教育」における「教育」）よりも広義に用いられており、そのなかには教育の名の下で遂行されようとする教化や弾圧も含まれる。その意味で、本論文における「教育」という語のやや複雑な含意について、著者による概念定義を通して説明する必要があったのではないかとの指摘があった。また、上記のこととかかわって、とくに論文の後半部分において言及されている「青少年の善導」や「精神教育」という枠組みについて今一步踏み込んだ検討がなされることで、教育学研究としてのパラフレーズがより明確になる可能性がある、という意見もあった。本論文では未解明な部分も残されていることが示唆されており、著者のさらなる研究の発展を期待したい。そうした課題の解決は著者が他領域との対話を進展させていくうえで重要となるであろう。

これらの指摘は、著者の今後の研究への期待の高さを示すものである。本論文は、以上の通り、想像の「軍都」との関連でモニュメントを読み解く着眼点とテーマの重要性、論の展

開の重層性、今後の学際的な議論への接続性、社会における想起実践への架橋可能性の観点から、日本教育学会奨励賞にふさわしい研究として評価できる。